

[博士論文審査要旨]

申請者: Eyo Shiaw Jia

論文題目: The Vicious Cycle: A Case of Bioventures in Japan (1990-2010)

審査員: 米倉誠一郎

清水洋

島本実

本論文は、日本のバイオ技術産業におけるベンチャー・ビジネスの発展を妨げている要因を歴史的に分析することを目的としている。日本政府は、1990年代からバイオ・ベンチャーの興隆のために、基礎的な研究開発への政府支出の増加や、産学連携を促進などさまざまな施策を講じてきた。その結果、バイオ・ベンチャーの数は増加し、ベンチャーへの期待は大きく膨らんだ。しかしながら、依然としてアメリカやイギリス、ドイツなどと比較すると日本のバイオ・ベンチャーは発展したとは言いがたい。

インタビュー調査と特許、財務情報などから、本論文は、サイエンス型のベンチャー・ビジネスに必要と考えられている企業家精神と労働の流動性、産学連携、そしてリスクマネーの流れを分析し、日本の上場を果たしたバイオ・ベンチャーの実情を描き出している。本論文は、日本のバイオ・ベンチャーは、研究開発の初期段階を超えて、製品化するまでにかかる研究開発に資金が回らず、それが研究開発をさらに遅らせ、その結果、さらに資金が足りなくなるというビシヤス・サイクル(Vicious Cycle)に陥っていると結論づけている。

本論文の最も大きな貢献は、二つある。第一は、1990年代からの日本の政府による制度の変革によって、日本のバイオ・ベンチャーの発展について楽観的な見方をする先行研究に対して、冷静な分析によって研究資金の不足がもたらす重大な構造的悪循環を提示している点である。これまでサーベイ調査など量的な調査はあるものの、本論文のような厚い質的調査はなされておらず、本論文の大きな貢献である。また、本論文の中心的な考察である2社の詳細なケーススタディは、日本の全上場バイオ・ベンチャーのサーベイとアメリカ、イギリス、ドイツとの国際比較により裏付けされており、その分析の内的妥当性も高い。第二は、今後最も重要と考えられる知識集約型いわゆるサイエンス・ベースト産業に関するインプリケーションである。周知のように、バイオ産業のように不確実性が高く、開発投資が巨額にのぼる産業においては、これまでの産業育成とは全く異なる発想が重要である。本論文の「悪循環」に対する警鐘には日本の政策担当者やビジネスマンが謙虚に耳を傾ける要素が詰まっている。

他方で、もう一段深い理論的考察を加えることによって、さらに一般性の高い洞察が生み出された可能性も否定できない。また、本論文では、バイオ・ベンチャーに分析の焦点を絞ったため、垂直統合型の製薬企業とのダイナミクスは検証しきれていない側面もある。しかし、これらの点は、日本におけるベンチャー・ビジネスの問題点を冷静に浮き彫りにした本論文の価値を損なうものではない。今後の課題であるが、口頭試問でもこうした問題点は十分認識されており、今後の研究課題として大きく展開されると考えられる。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものとして判断する。